

入賞論文

課題

未来を担う子どもと共に歩む  
確かな教育実践

最優秀賞  
【総合的な学習】  
「社会に開かれた教育課程」の実現を  
「総合的な学習の時間」から

熊本市立日吉東小学校  
田山 雅博

1 研究主題について 【何ができるようになるか】

これからの未来を生きる子どもたちには、刻々と変化する社会環境の中で、他者と協働しながらいずれも自ら考え、判断し、適切に対応し、よりよい生活を楽しんでいる子どもたちになってほしい。そのために、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習改善を求めるとは必ずである。本研究では、6年生の総合的な学習の時間を中心として、「熊本地震復興数え歌をつくりたい」という単元を進めていった。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、学校外の社会とも連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を、まずは「総合的な学習の時間」で目指し、本研究主題を設定することとした。

2 副題「熊本地震復興数え歌」づくりへの思い  
いー「はじめに」に代えてー【何を学ぶか】

本研究は、平成29年度日吉東小6年生の総合的な学習の時間「熊本地震復興数え歌をつくりたい」の実践をまとめたものである。彼らが6年生となった平成29年4月は、熊本地震から1年が経ったときであった。児童は、熊本城をはじめ、復興が道半ばのところがあること、またそのときもお仮設住宅に住んでおられる人たちが

がいっしょにやることも知っていた。そして地震当時は本学年の児童も含めて、本校では数百人の方々が避難生活をされていた。それにもかかわらず、すでに児童の周りでは、記憶の風化が感じられた。

学校における避難所が閉じられ、少しずつ復興が進む状況下で、熊本地震について児童がもてる力を出して、主体的な学びをどのように構築していったらよいか、と悩み模索しながら、4月に学びのスタートを切った。

そのような中で出会ったのが、年度当初熊本日新聞に掲載されていたある記事であった。「数え歌」で震災伝承」という見出しのそれは、明治22年の熊本地震の際、当時の様子が数え歌にされた資料を、熊本県立大学大島准教授が発見されたという記事であった。民衆が災害を伝え、記憶する手法として数え歌が用いられていた事実を知り、6年生児童にこの記事を紹介したことから、この研究はスタートした。大島准教授が発見されたその数え歌の歌詞には、東北なまりの表現が見られ、災害を語る数え歌が、東日本大震災で被害の大きかった東北地方にまで広がっていたことに運命的なことを感じた6年生児童に、「私たちが、平成の熊本地震を伝える数え歌をつくりたい」との思いが生じたのである。

本研究は、熊本地震の数え歌をつくることを

通して、平成の熊本地震のことを後世に伝え、記憶を風化させないための歴史・文化の継承者（未来の創り手）として、社会参加・社会貢献する児童を育てることをねらいとした。この研究・単元では、熊本地震のことを振り返り、「未来に向けて、熊本地震の記憶をつなげていきたい」との児童の思いを大切にしたい。そして、この学びで完結することなく、今後の児童の人生で、突然に起こるかもしれない災害時に生きるものとして、今回の地震によって、明治の熊本地震のことを、ほとんどの熊本県民が知らなかったことが報道等でも明らかになったが、児童の創作した数え歌を広く公開することなく、平成の熊本地震が決して風化することなく、今後の大地震の際に生きる一助ともなるよう、研究を進めることとした。

3 研究の内容 【どのように学ぶか】

(1) 研究の仮説  
「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業に、「学校外の社会との連携・協働」を重ねて「総合的な学習の時間」の授業を構築していくことで、「社会に開かれた教育課程」が実現するのではないか。

(2) 研究の中心

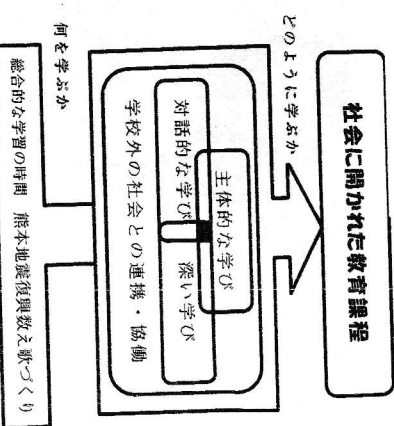
- ① 主体的な学びとなる工夫
- ② 対話的な学びとなる工夫
- ③ 深い学びとなる工夫
- ④ 学校外の社会との連携・協働の工夫

(3) 研究の具体的方策

- ① 主体的な学びとなる工夫について  
ア 児童の学びの意欲を高める出会い  
イ 学びが見え、継続できる評価
- ② 対話的な学びとなる工夫について  
ア 外部の人材、先哲の考え方の活用  
イ 児童の対話の積極的な促し
- ③ 深い学びとなる工夫について  
ア 思考ツールの効果的な活用

- イ 他教科の学びの活用
- ④ 学校外の社会との連携・協働の工夫について  
ア 「熊本地震復興数え歌」発表会の設定  
イ メディアや外部人材の効果的な活用

何ができるようになるか



図④ 1、2、3をまとめた研究の構想図

4 研究の実践

- C 明治時代にも、大きな地震があったんだ。
- C そのときも熊本城が大きく壊れていたんだ。
- C 大島先生の話をぜひ聞いてみたいな。そして私たちも数え歌をつくりたいな。先生、何とかありませんか。
- C もし私たちがつくりたいなら、避難所の経験も数え歌で知らせたいな。
- C テレビに取材してもらったらいいんじゃない？



写真⑤ 明治の熊本地震の際につくられた数え歌

その授業の中でご指導いただいた明治の熊本地震の数え歌の特徴(○)と数え歌づくりへのアドバイス(◎)を以下に示す。

- 345のリズムで美しい
- 歌って覚えやすい
- 例えが多い

- 5番に東北の方言 東北まで伝わっている
- 歌は記憶である
- 歌がいはばん伝わるメロディアだった
- 20番までつくるのが基本
- ◎親近感、恐怖、リアリティを増すため熊本弁を入れたほうがよい
- ◎恐怖だけ、起こったことだけではなく、みんなのがんばり、将来への希望、助け合ったこと、何が必要か、どうやって乗り越えたか、みんなに歌ってもらえるような数え歌づくりを……

- この授業後の、児童の声を以下に示す。
- この数え歌は、東日本大震災のあった東北にまで伝わっていたんだ。何だか今回の熊本地震と東日本大震災の運命を感じるね。
  - 平成の熊本地震の数え歌をつくる気持ちが高まってきました!
  - 先生、そしてこれを発表し、みんなに知らせましょう。

数え歌が復元された際には、熊日の記者の力から、新聞記者としての視点で、数え歌がより伝わりやすいものとなるためのアドバイスを受けた(写真◎)。アドバイスを基に、さらに一つ一つの言葉にこだわって数え歌を吟味し、児童は自分たちで言葉をついていった。児童から聞かれた言葉を、以下に示す。

- 熊日の○○さんからいただいたアドバイスのように、日吉東という地域性と小学生らしさをもっと出したほうがいいな。よし、その点を修正していこう。もっとよい言葉を探していこう。

グにアツアツされた言葉を以下に示す。

「熊本地震を題材として作成した『復興数え歌』の発表会だったので。作品は素晴らしい、とても6年生が作ったものとは思えません。～あまりの出来栄に驚愕して、今度は発表の演出に感激が止まりませんでした。～伝えたかったのはこういう事です。皆さんは後世に残る素晴らしい作品を創り上げました。心から感激しました。あつてはならない事だけど、またどこかで大地震があった時、きっとこの歌に助けられる人がいると思います。私は阪神・淡路大震災を経験した時、なす術がなく無力感と絶望に苛まれました。その気持ちを引かず、たまたま今日に至っています。ですが、こうして皆さんの役に立てる働きができたことで、過去の震災を乗り越えることができたと感じます。指導に奸して大きな感謝をいただいたけど、このように機会をいただけたことに私の方が感謝しています。本当にありがとうございます!」  
(プロダクティビティ学部の、いわば抵抗の記録ー2018.3.8より 抜粋)

(3) 研究主題との関わりについて

- 授業前、授業中、そして授業後も、学校外の社会と連携・協働を効果的に図ることで、学びが深まり、広がり、本校の6年生の「総合的な学習の時間」が「社会に開かれた教育課程」の実現へとつながっている。
- (4) 研究の中心◎④ (主体的な学び、学校外の社会との連携・協働) について
  - グラフ・チャート・マインドマップの活用を図りながら、明治の熊本地震の数え歌と印象的に出合わせ、発表会と新聞紙面でそれを公開するという、児童にとつて魅力あるゴールを設定することで、主体的な学びの展開が可能となった。児童アンケート下からもわかるように、年間を通

して児童の意欲は鼓舞であった。

- 児童の毎時間の振り返りに、教師がアドバイスをを行うことで、児童は学びの中での自分のよさやがんばり、課題をつかみ、さらに主体的に他者と協働して学習にのぞむことができるようになった。教師からの受容や成長を促す声かけなども行いやすく、継続した評価が可能となった。
- 「熊本地震をつなげる」との思いが実現し、児童は大きな成就感を味わっていたが、「未来の創り手」と成長するよう今後も声かけを続けたい。

(5) 研究の中心◎④ (対話的な学び、学校外の社会との連携・協働) について

- 児童同士の協働、地域の人たちとの対話、先哲の考え(明治の数え歌)を手掛かりに考え、自己の考えを広げ、深め、「熊本地震復興数え歌」としてまとめていく「対話的な学び」がいろいろなか場面で実現できた。
- 未来の創り手として学びを長期的に生かすことだけでなく、対話をさらに充実させ、短期的にも生かす工夫も並行して行う必要がある。

(6) 研究の中心◎ (深い学び) について

- 児童は座標軸を使いこなし、自分たちの考えを明確にしていた。それを基に、よりよいアイデアを協力しながら出していくことができた。
- 児童の発言や考えの多くに、他教科での学びを生かしたものが多くあった。特に、国語や社会の学びを生かして、課題を解決する姿が見られた。
- 学習内容においては、座標軸でない他の思考ツールを利用したほうがよい場面も考えられた。場面に応じた思考ツールのさらなる活用の在り方を考えていく必要がある。

6 創りあげた「熊本地震復興数え歌」～「おわりに」に代えて～

以下に、児童が言葉を紡ぎ、一所懸命に取り組み、創りあげた「熊本地震復興数え歌」を示す。下のものを、B4サイズにラミネート化し、地域、家庭、近隣校等に配布し、掲示していた。児童は、歴史・文化の継承者として、未来の創り手として、今後も社会参加・社会貢献していくであろう。

平成二十九年四月十六日 熊本市 復興数え歌

一 石垣五守閣 熊本城は崩れ落ち  
二 藤汁カレシアルツ米 幾後に残った石つ  
三 全園からのホラツナイ 創造的な復興が變らぬ熊本百十カ  
四 四月十四日 復興の場 平成二十八年の  
五 國府高松いす並 SOSを伝えたは  
六 孝善男女のホラツナイ 心強い助か  
七 電氣満ちた向もきん 水は我が國運  
八 止まらぬ向もきん 電氣満ちた向もきん  
九 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十一 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十二 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十三 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十四 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十五 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十六 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十七 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十八 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
十九 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場  
二十 熊本城は復興の場 復興の場は復興の場

写真◎ 配布した熊本地震復興数え歌